

【日本音楽学会国際研究発表奨励金・受領者報告書】

「日韓共同セミナー2012」実施報告及び発表体験記

東京藝術大学大学院 音楽研究科 音楽文化学研究領域 音楽学研究分野
博士後期課程 2年 神保 夏子

1. 発表学会について

学会名：第2回日韓音楽学共同セミナーThe 2nd Korean-Japanese Exchange Seminar in Musicology

テーマ：現代韓国と日本における音楽の創作・パフォーマンス・研究・美学 (Musical Production, Performance, Research and Aesthetics in Modern Korea and Japan)

開催日程：2012年11月13日(火)～15日(木)

開催地：ソウル大学音楽学部 (大韓民国)

標記の催しは、東京大学とソウル大学で音楽研究に携わる大学院生を主たる対象とした国際交流セミナーである。2011年11月、東京大学駒場キャンパスにてその第1回が開催され、今後も継続が予定されている。第2回としてソウルで開催された今回のセミナーでは前年度よりも韓国側の参加者数がやや増え、東京大学のヘルマン・ゴチェフスキ教授、ソウル大学の呉姫淑教授の指導の下、日本側からは5名、韓国側からは6名の学生・若手研究者が研究発表を行った。

セミナー開催に先立って、8月頃より日韓両国の参加者がメーリング・リストを通じて自己紹介と発表題目の告知を行い、開催1週間前までに各自の原稿をメール添付にて相互回覧した。セミナー1日目は、まずそれぞれの参加者が自身のペーパーの概要を発表し、これらに基づいて全員でディスカッションを行った。2日目は音楽鑑賞を含む文化交流に充てられ、3日目のフォーラムでは初日の議論の内容を踏まえた形で、1人当たり20分のよりフォーマルな研究発表を実施した。以下ではこの最終発表について記す。

2. 研究発表要旨

セッション：Open Forum (Presentation section 1)

日時：2012年11月15日(木) 13:40-14:00

発表のタイトル：At the Piano with “Our” Composers: Marguerite Long (1874-1966) and the Notion of National Tradition in Relation to the Modern French Music

【要旨】

20世紀初頭から戦後にかけてパリを拠点に活動したピアニスト・ピアノ教育者のマルグリット・ロンは、同時代・同地の多くの作曲家と交流を持ち、演奏・教育の両面で近代フランス音楽の擁護・普及に尽力した人物である。本発表では、近代フランス音楽について

のロンの様々な言説の批判的読解を通して、演奏におけるナショナルな「伝統」、特に当該国の「大作曲家」に起源をもつとされるそれが、権威ある演奏家の語りを通して一種のナラティブとして形成されていくプロセスの一端を明らかにすることを試みた。

はじめにロンのキャリアの概要の説明を行った。ここでは、ロンが女性としての職業的ハンディを乗り越え、「伝統」の尊重を旨とするパリ音楽院ピアノ科高等クラス教授の地位を 1920 年に手にしたこと、1932 年以降は国からフランスの公的な文化使節としての任務を与えられ、特に第二次世界大戦後この方面で活躍したことを前提として確認した。

次に、ロンがその伝統の継承者を名乗っていた上記の三人の作曲家のうちドビュッシーを一例として取り上げ、彼女がこの作曲家について記した 1920～60 年代の様々なテキスト（マスタークラス用の講義草稿、雑誌論文、スピーチ原稿、インタビュー記録、教則本等）を分析した。結果、これらの言説が、(1)作曲家自身の言葉や演奏の記憶に基づく演奏「伝承」の具体的な内容、(2)伝承者としてのロンと作曲家との関係性を密接なものとして定義し、伝承という行為それ自体を一種神話化する語りの枠組みという二つの要素の絡み合いから構成されていることが明らかになった。

こうしたロンのフランス・ピアノ音楽論の全体を時系列的に並べると、特に 1930 年代後半以降、強調点が次第に(1)から(2)へと移行して行くことが分かる。この変化は、第二次世界大戦前夜から戦後にかけての政治的状況の変動に伴う国内のナショナリズム的機運の高まりと時期的にパラレルな関係にある。実際、ロンと 3 人の作曲家との職業的・人間的関係性をめぐる「物語」は、彼女自身の語りやメディアの言説を通じて、フランス国家の栄えある文化的伝統の担い手としてのロンのアイデンティティと緊密に結びつけられ、大戦後にその頂点に達するのである。

以上より、ロンはその演奏家・教育者・文化人としての多面的なキャリアを推し進める中で、おそらくは意識的な戦略の一環として、新しい国民的シンボルを求める同時代のフランス社会の欲望に巧みに応えながら、フォーレ・ドビュッシー・ラヴェルの演奏「伝統」に関するナラティブを紡ぎだしていったと考えられる。

3. 質疑、反響と感想

【質疑、反響】

・発表中で、ドビュッシーの「伝統」について語るロンの言説の根底には、彼を作曲家としてだけではなく、ショパンのピアノイズムを受け継ぐ「ピアニスト」と見なす考え方があ
るようだ、と説明したところ、ポーランド人であるショパンがフランスの伝統の一部とみなされるのは奇妙ではないか、という指摘を受けた。これに対してはさしあたり以下の通り回答した。周知のとおりショパンのプロフェッショナルなキャリアが開花したのはパリであり、ピアニスト・ピアノ教師としての彼の影響は同地でとりわけ甚大であった。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのパリでショパンの弟子を名乗るピアニスト・教師が幅を利かせていたことからしても、彼の名前は（その出身にもかかわらず）いわゆるフレンチ・

ピアノの系譜の中にごく自然に溶け込んで受容されていたように思われる。20 世紀前半のピアニストが抱いていたショパンのナショナル・アイデンティティ観の詳細は今回の発表の範囲を外れるが、それ自体きわめて興味深い問題である。

・ナショナリズムや伝統と音楽の関わりは、他の何人かの発表者との共通のテーマでもあり、国ごとの歴史的・政治的背景の違いや特徴などが繰り返し話題に上った。また、「作曲」や「聴取」だけでなく「演奏」という観点からこのテーマに取り組むことの意義も指摘された。

【所感】

今回のセミナーでは、原稿執筆・ディスカッション・発表がすべて英語で行われたが、ノン・ネイティブ同士かつ少人数という気楽さも幸いしてか、意思疎通に関して語学面での壁を感じることはあまりなかった。非母国語での原稿作成に思った以上に時間がかかってしまったことも含め、反省点、改善しうる点は枚挙にいとまがないが、こうした経験の積み重ねは、今後、より大規模な国際会議に参加する際にも大きな励みになると感じた。

他の参加者の発表は、トピックやアイデアだけでなく、議論の展開の仕方やプレゼンテーションのスタイルなどに関しても参考になる点が多かった。実際、約 10 日後に日本音楽学会全国大会での発表を控えていた筆者は、韓国のある参加者の発表にヒントを得て、構成面で大きく練り直しをはかることができた。

全発表の終了後に行われた韓国の伝統楽器・伽耶琴の演奏会も大変興味深かった。セミナー参加者の一人でもあった演奏者を通じて、そのミュージック・メイキングのプロセスや、音楽の伝統と創造、現代性や商業性等に関する話を直接聞くことが出来たことは、筆者にとって本セミナーの一つの収穫であった。

研究成果の相互の共有による学術的な意義は言うまでもなく、音楽を通じたアジアの若手研究者同士の文化交流や国際親善という観点からも本セミナーが大変貴重な機会となったことを申し添え、住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に心からの感謝を申し上げたい。